

H F H J News Letter



31

2014 March

ハビタット・ジャパン ニュースレター
第31号 2014年3月発行

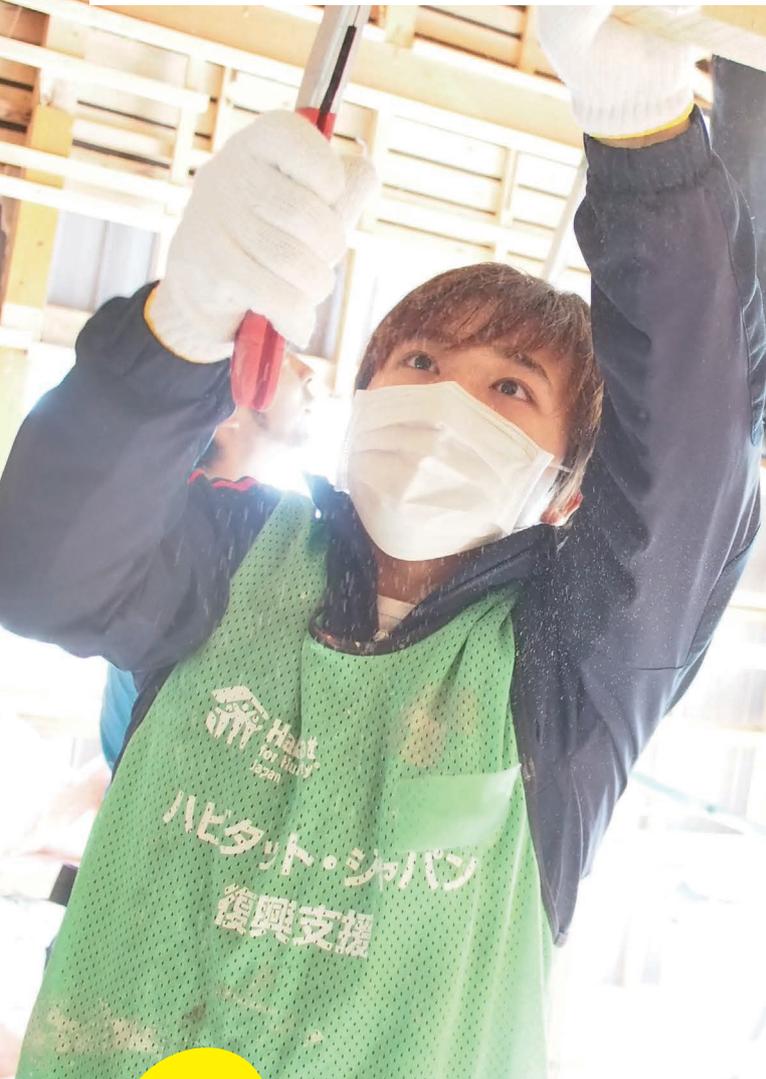


活動の現場から

東日本大震災から3年

KIZUNAプロジェクト フィリピン台風30号被災者支援

東日本大震災から3年



東日本大震災の発生から、
3月11日で3年が経ちました。
ハビタット・ジャパンは、がれきの撤去や
生活物資の配布といった緊急支援に取り組み、
震災翌年には、一世帯でも多くの家族が
安心して暮らせる場所を取り戻せるよう、
家屋の修繕支援を本格的に開始したほか、
住宅再建を支えるためのコンサルテーションなどの支援を行いました。
また、地域の力を支えるために、個人世帯だけでなく、
公民館などの公共施設の建築・修繕支援を行い、
地域全体の復興と活性化を応援してきました。

2013年参加ボランティア人数：646名

- 1 修繕支援数： 家屋修繕数 53世帯
公民館/地域施設建築・修繕数 4件
- 2 コンサルティング支援世帯数： 86世帯
- 3 ソーラー設置支援数： 個人世帯 13世帯 公民館 4館
- 4 コミュニティ支援数： 21件

※コミュニティ支援案件とは、ハビタットが地域力を高めるためにサポートした地域行事の実施や、被災地域や仮設住宅内でのコミュニティ作り、また地元住民による復興に向けた街づくり計画などへの支援を指します。

これからの課題



仮設住宅の入居率は、いまだ9割程と高いままです。被災者の中には、「これからどうすればいいのか」という焦りが次第に大きく広がってきていますが、その一方で、社会の関心は薄れてきており、NGOをはじめとする市民社会の支援活動は、概して縮小の傾向を見せています。ハビタットでも、これまでのような形や規模で支援を継続することが難しくなっています。

そこで…

2014年、「深める」×「広がる」支援へ

今年、挑戦していきたいと考えているのが、「深める」×「広がる」支援です。住まいの問題は国内外でより一層その深刻さを増していますが、これらの問題はハビタットだけで解決できるものではありません。社会の問題はその社会全体で解決していくことが、重要かつ現実的なアプローチであるという認識のもと、社会の中で意識を高め、きっかけを作るようなベクトルでの支援を展開していきたいと考えています。多くの人々と共に、人間が人間らしく、安心して暮らせる場所を築いていくことがハビタットの目標です。





台風30号被災者支援

～Re-Build Philippines Program～



2013年11月8日、最大瞬間風速105mもの破壊力を持った台風30号が、レイテ島やセブ島など、フィリピン中部のビサヤス地方に上陸し、6,201名が死亡、1,785名が行方不明となりました。日本国内での報道は、最近では沈静化してきていますが、台風30号がフィリピンにもたらした被害は、東日本大震災に続く、ここ数年で最大規模の自然災害のひとつです。被災家屋軒数は、2010年に発生したハイチ大地震の6倍にあたる110万戸にのぼりました。そのうちの約半数、55万戸が全壊という大規模な被害状況です。

📦 長期的な復興に向けて

災害時にまず必要なのは、安心して休める場所です。ハビタットでは、これまでの災害支援の経験を活かし、緊急支援活動として工具や資材の入った「住居修繕キット」の配布を行っています。フィリピンの台風被災地でも、発災1週間後の11月14日から、イギリス政府が提供してくれた防水シートなどが入った緊急支援キット4000個の配布を行いました。そして、2週間後の11月22日からは、被災者が自ら簡易的な住居を確保できるよう、「住居修繕キット」の配布を開始しました。現在も、セブ島北部の都市ダンバンタヤン、サマル島

東部ギアン及びレイテ島で、パートナー団体と共に、合計3万キットの配布を目標に活動を続けています。その一方で、今後の復興支援につながる取り組みとして、恒久的に住まうことができる「コアハウス」3万戸の建築に向けてその一歩を踏み出しました。タクロバン市当局が提供する10ヘクタールの用地に、850世帯が暮らせる住宅の建築を行う予定です。「コアハウス」は、簡素な住宅ですが、きちんとした住居に住まうことは、人間が人間らしい健全な生活をするための基礎であり、災害から立ち直り、健康を守り、子育てや仕事に取り組むための活力の源になるとハビタットは考えています。

🗨️ 「住居修繕キット」を手にしたアブレンシアさんの声

サマル島東部ギアンに暮らすアブレンシアさん一家は、奥さんと息子2人の4人家族です。自宅は強風により倒壊してしまいました。ハビタットの「住居修繕キット」を受け取ったアブレンシアさんは、家族そろって一日も早く生活再建に取りかかりたいと、キットと廃材を利用して3日間で簡易住居を仕上げ、家族を避難先から呼び戻しました。「漁船を失い、漁に出ることができず、収入が経たれた今、ハビタットの支援がなかったら、自宅再建は不可能でした。ありがとうございます」とアブレンシアさんは話してくれました。



Family Sponsorship

タイ



ファミリースポンサーシップ

～タイの家族の笑顔を支える～

世界の家族とつながる
新しい選択肢です



シンプルながらもきちんとした住まいは、人間が人間らしい健全な生活を送るための基礎であり、活力のみなもとです。ファミリースポンサーシップは、日本の支援者（スポンサー）が、事業地の家族（ファミリー）が住居をもてるよう支援する新たな取り組みです。

ファミリースポンサーシップを通じて 支援したブンジュアさん一家

ブンジュアさん一家は、旦那さんと子ども3人孫1人の6人家族です。5年前に借家を突如追い出され、一時は路上での生活を余儀なくされました。その後、貯金をはたいて友人から土地を安く譲ってもらい、残ったお金と拾い集めた廃材で小屋を建てて暮らしていましたが、その小屋には窓も扉もなく、壁と屋根は隙間だらけでした。屋根は雨漏りし、害虫が屋内に入り込んできます。「毎年台風の時期には子どもたちを友人に預け、夫婦2人で家が吹き飛ばされないよう一晩中戦います」とブンジュアさんは話します。



ファミリースポンサーシップで 知る・支える・繋がる

ブンジュアさん一家を支援したのはある日本企業です。地域に根差した支援活動を長期的に安定して行えることから、スポンサーとして参加しました。建築費、運営費の寄付だけでなく、昨年10月には、社員のチームをボランティアとしてタイに派遣し、新居の建築活動にも参加・協力しました。灼熱のなか、家族と一緒に砂を運び、ブロックを積み上げる過程で、言葉の壁を乗り越えた「絆」が一家とボランティアの間に築かれているようでした。そして、2月、ブンジュアさん一家から、新居での新たな生活の第一歩を踏み出したというお便りが、写真と共に届きました。



ハビタット・ジャパンでは、引き続きファミリースポンサーを募集しています。
ご質問やお問い合わせは、お気軽にハビタット・ジャパンまでお寄せください。

2014
年

ハビタットの国内での取り組み

2014年には、**3**つの「**深める**」×「**広がる**」支援に取り組みます。

① コンサルティング事業で住宅再建のサポート

被災者世帯の状況に合わせて住宅再建に必要な情報を提供し、相談を受けることで、一日も早く元の生活を取り戻せるよう被災者を支えます。みなし仮設入居者も含め、コンサルティングを必要とする被災者世帯に引き続き支援を行っていきます。



② セルフ・ビルド支援



セルフ・ビルドとは、自らの手で家を建てることです。行政主導の集団高台移転、災害公営住宅への入居、自力による自宅再建という選択肢のいずれを選ぶことも困難な状況にありながら、自分の手で家を建てよう動き始めた方を、岩手県大船渡市で支援しています。日本では、プロでなければ家は建てられないという思い込みや、セルフ・ビルドは一部で話題になっているだけの趣味の領域という感覚が根強くありますが、素人でも簡素ではあるがきちんとした家を建てることのできるという認識や、周囲の協力があればセルフ・ビルドの難易度を下げることができるという理解を社会に広げることを期待しつつ、作業を進めています。工務店に発注するお金があれば家が建てられる、なければ建てられないという二者択一の構図に、セルフ・ビルドによる自力再建という第3の可能性を示唆することを目指しています。

③ ホームリペア支援

経済的な理由から、震災により損傷した床や壁の補修すら満足にできない世帯を対象に、コンサルティングを含めた住宅の修繕支援を行います。東日本大震災の被災者支援では、津波被害の甚大さや仮設住宅の住環境には注目が集まった反面、内陸部の自治体で地震により被災した世帯のニーズは十分に顧みられず、支援も十分に届いていないという現状があります。そこで、ハビタットは、内陸の地震被災者世帯で、今もなお不安を抱えて暮らす家族の住宅再建をボランティアと共に支援していきます。素人でも簡単な修繕ならできるという認識を広めると共に、地震被害により取り残された被災者世帯の現実をメディアや参加ボランティアを通じて、行政や社会に伝えていきたいと考えています。

新プロジェクト

KIZUNAプロジェクト

～世界を舞台に、東北の復興を支える若者を育てよう！～

被災地の復興のためには、その地域に暮らす人々が主体的に復興計画に参画することが重要だとハビタットは考えています。そこで、被災地の将来を担う若者の育成を目指し、「KIZUNAプロジェクト」を開始しました。KIZUNAプロジェクトは、被災地の若者に、海外建築ボランティアプログラム(GV: Global Village Program)へ奨学生として参加する機会を提供することで、海外でのボランティア活動や現場で出会う人々との交流を通して助け合いの精神を育みながら、チームワークを経験してもらうための試みです。この経験から得た学びが、東北の復興を担う若者の自信や活力に繋がるとハビタットは考えています。

● KIZUNA奨学生：磯部亮太さん

第1回KIZUNAプロジェクトの奨学生に選ばれ、タイでGVに参加した磯部亮太さんは、帰省先の実家から在籍する東北大学に向かう列車の中で被災しました。KIZUNA参加の動機を「日本が今回の震災で世界中の国々から有形無形の多大なる支援を頂いていることに強い感動と感謝の気持ちを感じていましたし、そうした支援が先進国だけでなく、非常に貧しい国や、政情の安定していない国からもあったことを知っていました。それを当たり前と思ってはいけなくて、国際社会に生きる一人の日本人として必ず何かの形で恩返しをしたい、という気持ちがずっと心の中にありました」と話します。そして、「僕は積極的に作業に参加し、声を出して周りのメンバーを鼓舞しました。熱意に個人差があるとはいえ、みんなボランティア活動に自ら希望して参加してくれたメンバーですから、その背中を押していくことで、チームの気持ちを一つにまとめ、結果として、ボランティア精神を高めあうことができました」と自らの経験を語る磯部さんは、東北大学に設立されたハビタット・ジャパン学生支部(CC: Campus Chapter)に所属し、後輩たちが東北の復興や海外で必要とされている支援のための活動に関わりやすいよう、環境を作り整えていく意欲に溢れています。



KIZUNAスポンサーを募集中です。ご質問やお問い合わせは、お気軽にハビタット・ジャパンまでお寄せください。



ホームリペア支援

昨年10月、東松島市で田中さん宅の修繕作業をボランティアと共に行いました。田中さんのご自宅は、地震被害により数か所が損傷し、半壊の認定を受けています。ハビタットが東松島市で行った支援を受け、2013年8月、補修が急がれた室内の壁を貼りかえることができました。残された損傷箇所は、自力での修繕が必要でしたが、田中さん一家は、手をつけられないまま、不安を抱えながらご自宅で暮らしていました。特に、外壁にできた亀裂は、建物の構造に悪影響を及ぼし、雨漏りを引き起こす可能性も考えられました。そこで、「修繕が必要なことは良く分かっているが、外壁まで修理するための資金の目途が立たない。できればプロでなくても良いので、ボランティアで補修してもらえるとありがたいのだが」という相談が、田中さんから寄せられました。これを受け、ハビタットは再度現場を調査し、ボランティアを動員して外壁の修繕を行うことにしました。この支援実施は、ハビタットが2014年から本格的に目指す「深める」×「広がる」支援の一環です。田中さん宅の修繕作業は、ボランティアの協力の元、5日間で終わることができました。外壁に入った亀裂の隙間をコーキング材で埋め、ペンキでその上を塗装した他、玄関まわりの破損した木部や雨どいの補修も併せて

行いました。素人による修繕でしたが、安心して暮らせる自宅を田中さんが取り戻せるよう支援することができました。

今年2月より、東松島市で行ったホームリペア支援を、東松島市に隣接する内陸の町、美里町でも開始することになりました。美里町は、津波の被害は受けなかったものの、地震による被害が大きく、今もなお、支援を必要とする被災者世帯が取り残されています。ハビタットは、(特活)ジャパン・プラット・フォームの助成を受け、まずは20世帯を対象に、美里町でホームリペア支援を行い、被災者世帯の住宅再建を支援します。



修繕が必要だった田中さん宅



完成!

すべての作業を終えると、田中さんは「寒い中、どうもありがとうございました。これで安心して暮らすことができます」と、安堵した様子で話してくださいました。

Self Build



セルフ・ビルドへの支援

セルフ・ビルド支援を行っているのは、大船渡市越喜来(おきらい)地区に暮らす佐藤さん(仮名)のお宅です。佐藤さんは、若い頃、県外で大工の職に就いていましたが、20代で故郷の越喜来に戻りました。40代で体を壊してからは、漁業でアルバイト程度の収入を得ながら母親と二人で暮らしていました。お二人は、東日本大震災の津波で自宅が流失して以来、仮設住宅での生活を余儀なくされています。しかしながら、仮設住宅での暮らしには期限が定められています。仮設住宅の閉鎖後は、災害公営住宅に移り住むという選択肢も考慮した佐藤さんですが、地元には災害公営住宅の建設予定がない上、20年後には災害公営住宅の家賃特例措置は無くなり、一般の公営住宅と同様の賃料を払わねばなりません。安定した職に就いて、定期的に現金収入を得ることが難しい佐藤さんは、生活する術がなくなるだろうという不安に苦しんでいました。そんな中、佐藤さんは、大船渡を拠点に活動が続いているハビタットの存在を知

り、高台に所有している土地に、これまで蓄えた貯金でなんとか家が建てられないかとハビタットにその思いを打ち明けてくれました。

この相談を受けたハビタットは、被災者の住宅再建を支えるために行っているコンサルティング事業で培った知識や、支援活動を通じて築いた地元工務店や建築家とのネットワークを生かし、どのような支援を行うことが可能なのかを検討しました。そして、安心して暮らせる場所を取り戻せるよう、セルフ・ビルドによる自宅の再建を支援することにしました。

セルフ・ビルド方式で家を建てることで、佐藤さんは最終的に300万円程度で住宅を完成させることができると見込んでいます。佐藤さんの想いを後押しするために、昨年10月から始めたセルフ・ビルド支援は、地元工務店や建築家などプロの支援、そして数多くのボランティアや地域住民の協力を得て順調に進められ、昨年12月に棟上げを無事終わりました。5月の完成を目指し、今日もまた、佐藤さんは多くの人に支えられ、共に汗を流しながらセルフ・ビルドによる自宅の再建に取り組んでいます。



4つの新しいCCが誕生

ハビタット・ジャパンの学生支部(CC: Campus Chapter)は、ハビタット・ジャパンの大切なパートナーとして、ハビタットの国内外における活動を支える大きな原動力です。これまでの10年間で、CCの数は徐々に増加し、昨年末の時点で22のCCが活動しています。CCは、国内外の建築現場で建築活動に参加する他、国内で写真展などのイベント開催を通じて啓発活動やファンドレイジング活動を行っています。2014年に入り、既に4つの新しいCCが誕生。CCの勢いは全国に広がっています。

武蔵大学
[A't]

東北大学
[As One]

北海道大学
[けんちくん]

京都橋大学
[Why Not?]

交流イベント「ハビタット・カフェ(ハビカフェ)」

ハビタット・ジャパンでは、ハビタットの活動に参加したことがある方や興味のある方など、どなたでも気軽にご参加いただける交流イベント「ハビカフェ」を定期的に開催しています。ハビカフェでは、毎回メインテーマを設定し、テーマに沿ったハビタットの活動をお伝えしています。ハビタットの活動を知り、ハビタットを軸に参加者同士で活発な意見交換を行い、自分でもできる“何か”を見つける機会となっています。次回開催は4月を予定しています。詳細などはホームページよりご確認ください。



ボランティアサポーター(ボラサポ) 制度 導入のお知らせ



ハビタットは「誰もが貢献できる何かを持っている」と考え、世界約80の国で、ボランティアや地域住民と共に、住居建築を中心とした支援活動を行っています。ハビタットの活動においてボランティアの参加は大きな柱のひとつです。これからも、ボランティアとの協力関係に基づく活動の在り方は変わりません。



ハビタットの活動において、ボランティアの皆さんとの協力関係をさらに強化していくために、ボランティアサポーター登録制度を導入いたします。ハビタットのパートナーとして、国内外の支援現場で活動してくだ

さるボランティアの皆さんには、2014年4月からボランティアサポーターとして登録をしていただきます。ボランティアサポーター登録費は、大人年6,000円、学生(25歳以下)年3,000円です。登録は1年間有効です。是非ご登録ください。

詳細は、ハビタット・ジャパンのHPをご覧くださいか、
info@habitatjp.orgまでメールでお問い合わせください。

今月の

ハビびと

ハビタット・ジャパンで活動する、熱き人々



上田 格さん

東北大学CC
"As One"代表



東北大学2年生の上田さんは、ハビタット・ジャパン初の東北地区のCCである“As One”の創設者です。団体設立のきっかけは、大学生がカンボジアで学校を建てる映画を見たことだと上田さんは話してくれました。「自分にも、社会に対して何かできることがあるはず。」そのような思いを抱いた上田さんは、日本大学のCCに所属する友人を介してハビタットに出会い、ハビタットの、そしてCCの魅力に惹かれ、東北大学に“As One”を設立しました。

「ボランティアをする人もボランティアの支援を受ける人も全員が“ひとつ”になって、“ひとつ”のゴールを目指して活動するという思いが、“As One”という名前に込められています。“As One”は、宮城を中心に被災地の復興を盛り上げ、東北の復興を長期的に支えていきたいです」と上田さんは熱い想いを語ります。

上田さんは、また、ハビタットが大切にする、現地の人と共に活動する支援のあり方に共感したと言います。CCとして活動する魅力に話が及ぶと、「同年代の他大学のCCメンバーとの交流は刺激が多い」、また、「CCとして活動することで、他県のCCに東北の復興を考えてもら

う機会を作り、彼らが東北に来る拠点となることで、全国のCCが“ひとつ”になって、東北の復興を力強く支えていくことを目指している」と教えてくれました。

「海外や東北のボランティア活動では、支援対象の方は違いますが、“As One”の目標である“ひとつ”になって支援するという点には違いがありません。支援活動を通して学ぶことも私たちには沢山あり、貴重な経験になります」そう語る上田さんは、東北の復興支援活動に参加する一方で、この春にはAs Oneのメンバーを率いて、初めて海外建築ボランティ



アプログラム(GV: Global Village Program)への参加を予定しています。その勢いは東北から世界に広がっていくことでしょう。

編集後記

この春、409名が海外建築ボランティアプログラムを通じて、アジア地域をはじめとする国々に渡り、現地の住居建築活動を支援しました。東日本大震災の被災地における復興支援活動を行ってきた3年間、海外でもこれまでと変わらぬ貢献を続けることができたのは、ボランティア、そして支援者の皆さまのお陰です。今後も国内外で、安心して暮らせる場所を必要とする人のために活動を続けて参る所存ですので、引き続きご支援賜りたく、よろしくお願い申し上げます。